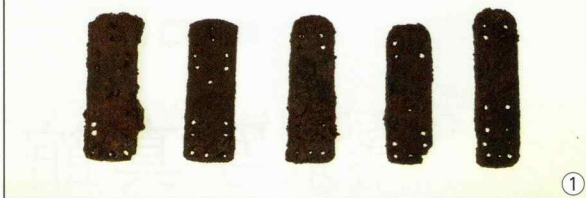


香取遺産



▲①鑄で孔がふさがっているが、左側 2 枚が緘孔 1 列、右側 3 枚が緘孔 2 列

▲②腰札…波状に湾曲してる様子が分かる

③紐が残っているものがある

②



③

vol.187

 城山1号墳に
副葬された挂甲

昭和38年に小見川地域の城山で全長70mの前方後円墳の発掘調査が行われました。三角縁神獸鏡など多くの副葬品が出土した城山1号墳です。6世紀の終わり頃の築造で、7世紀の初めまで追葬が行われていました。古墳時代の後期に当たります。この時代、香取地域の大半は海上国造の統治下にあつたと考えられます。棺を収めた石室の規模、副葬品の質や量から被葬者は、国造もしくはその一族の有力者と推定されます。今回は副葬品の中から甲を紹介します。

古墳時代の甲には、短甲と挂甲があります。短甲は方形や三角形の鉄板を革紐や鈿で留めて作られ、主に前期・中期の古墳から出土します。挂甲は細長い短冊状の板を紐で連結したもので、主に後期の古墳から出土します。短冊状の板を小札といい、連結する紐には緘紐と綴紐があります。小札は鉄製・木製・革製があり、大きさや形状、緘紐を通す緘孔の配列から分類できます。城山1号墳から出土した小札は鉄製で、破片に壊れているものもあり、正確ではありませんが800枚を超えていると思われます。出土した小札は幅約2～3cm、長さ約4～9cmのものがあります。緘孔は上端に縦列に並ぶものと縦二列のものがあ、それぞれ付随する孔の有無や数の違いがあります(写真①)。また、波状に湾曲した小札(写真②)は腰札といい、凸面を内側にして一周させ、腰紐で締めていました。腰札から下の部分である草摺りの最下段の小札を裾札といいますが、この裾札に腰札と同じ形状のものを使用する例があり、最も新しい形態と考えられています。

城山1号墳からは籠手も出土していますが、籠手以外に襟甲・肩甲・胸当・臍当・肘甲などの付属品が伴うかは、まだ分かっていません。現在、分類作業を行っており、裾札の形状や付属品の有無も判明すると思われます。